



Title	太宰治「作家の手帖」論：「とんちんかん」を狙う語り
Author(s)	廖, 秀娟
Citation	語文. 2017, 106-107, p. 145-155
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70990
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

太宰治「作家の手帖」論

—「とんちんかん」を狙う語り—

秀娟 廉

一、はじめに

「作家の手帖」は昭和十八年（一九四三）十月に『文庫』（第三卷第十号）に発表され、三つの話から構成された短篇小説である。いずれも「私」という男性作家が一人称語りの形式で遭遇した出来事と、それに対する感慨が語られている。第一話は、七夕をめぐる女の子の祈願、第二話は、煙草の火を借りた産業戦士のお札の言葉に清々しさを感じること、第三話は、何も考えずに歌い続ける隣家の産業戦士の奥さんに日本女性の強さを見出し、「戦争の将来に就いて楽観してゐる」ことである。そして、題に「手帖」とされているように、この三つの話が一見それぞれ無関係のようにも見えることから、三つの話の「接点」や「つながり」を考えるのが先行研究の目的の一つともいえよう。例えば、権錫永氏は、本作品に言及する際に、「形式的には、それぞれ全く無関係に列記されているよう見える。だが、決してつながりがない

わけではない」と述べ、作品の「接点」を考えてみた。巖大漢氏は「作家太宰治はどのような意図で、「私」という作家の手帖にしたためられた三つの物語を配した、このような小説作品を書いたのだろうか」という問題を提起した。⁽³⁾

一方、作品の全体ではなく、中の一話か二話のみを取り上げて戦時下における太宰の戦争に対する姿勢をみる。松本健一氏は第三話において「大戦争」を忘れて無心に歌をうたつて「奥さん」を取り上げて、太宰が「奥さん」の示した「庶民の生きかたのほうにこそ共鳴している」と述べ、「戦争指導者の戦争鼓吹にのせられたり、体制に強いられての奴隸の言葉をつかつたりしながらも、じぶんの歌をうたつてみせた」と指摘した。⁽⁴⁾そして、吉川裕佳氏は戦時下の文学作品における女性（「女声」）像の動員という視点から、女性のことばに触れた第一話と第三話に注目して論じた。戦後GHQの検閲下に不適切と思われる「女声」の部分——幼女の祈りや女性への安易な期待——が『黄村先生言行録』（一

九四七）に再録される際に削除され、改稿されたものの、「女の本性は無心である」という女性像がそのまま残つたことから、作中人物の「無心」こそが作者の狙いで、それは「生活のためできる限りの努力をする」という想いだと氏は指摘した。⁽⁵⁾

以上、見てきたように、先行論の多くは第三話に集中するか、或いは第二話を除く形で論ずるか、であつて、作品全体を論じたのは管見の限り、三篇⁽⁶⁾のみで、その中の二篇が三つの話の「つながり」に腐心するものである。それを裏返して言えば、作家「私」がどのような思いで三つの話を一つの「手帖」にしたかが容易に見つからないために「亀裂」と思われ、また、その「亀裂」を補うためにむやみに「接点」や「つながり」を探さざるを得ない研究の現況となつたのである。「作家の手帖」が「これまで重視されてきた作品とはいえない」と言わってきた一因はまさにそこにあると考えられる。本稿では、従来ほとんど触れられてこなかつた「私」の特徴的な語り方に焦点をあて、「作家の手帖」に新たな読みを提起してみたい。

二、矛盾を孕む語り

「作家の手帖」における戦争追随の一面は早くから指摘された。例えは、「オ星サマ。日本ノ国ヲオ守リ下サイ。／大君ニ、マコトササゲテ、ツカエマス。」（第一話）、「私は戦争の将来に就いて樂觀している」（第三話）など、要するに國家護持への言葉や、産業戦士への讃歌、戦争への樂觀視などの描写から、戦争加担や

時局迎合、戦争賛美といった解釈も可能だと断りながら、「時流に少々あいさつ⁽⁹⁾」をしてみただけの言説に過ぎないとみた論がある。他方、「戦争に対する庶民の無批判な受容が揶揄されている」⁽¹⁰⁾、「戦時下のチアリーダー」⁽¹¹⁾と見る論もある。

ところで、作中にみられる戦争加担の叙述から、戦時下の太宰の是非を定める前に、まず問い合わせたいのは、「私」の語りがどれほど信用できるのかということである。なぜならば、語り手の語りに多くの矛盾が存在しているからである。

女の子つて、実に抜け目が無く、自分の事ばかり考えて、ちやつかりしているものだと思った。織女さまのおよろこびに附け込んで、自分たちの願いをきいてもらおうと計画するなど、まことに実利的で、ずるいと思った。（中略）女の子たちは、そんな織女星の弱味に附け込んで遠慮会釈もなく、どしどし願いを申し出るのだ。ああ、女は、幼少にして既にこのように厚かましい。

第一話で、語り手の「私」は、「織女星の弱味に附け込んで遠慮会釈もなく」「手芸に巧みになるよう」⁽⁸⁾と、どしどし願いを申し出る女の子たちは「幼少にして既にこのように厚かましい」と考えていた。それに対して、「男の子は、そんな事はしない」と主張して、その証拠として、「現に私などは、幼少の頃から、七夕の夜には空を見上げる事をさえ遠慮していた」、「恋人同志が

一年にいちど相逢う姿を、遠目鏡などで眺めるのは、実に失礼な、また露骨な下品な態度だと思つていた」と、幼少の頃の自分を例として男の子は「ちゃんと礼節を心得ている」と大まじめに語る。

しかし、「幼少の頃」の「私」は、牽牛星と織女星が「一年にいちど逢う瀬をたのしむ夜」を、「はにかんでいる夜」で、「恥ずかしくて、望見出来るものではない」と率直に結び付けて、「恋人同士が一年にいちど相逢う」「よろこび」を如何にも心得ているようである。「幼少」なのに「逢う瀬」の「よろこび」を理解しているように語ることによって、「ちゃんと礼節を心得ている」どころか、逆にほろを見せてしまうのだ。それに続き、彼の脳裏にふと「怪しい空想」「けしからぬ空想」が起こつた。

今夜これから誰か女のひととのところへ遊びに行き、知らん振りして帰つて来る。そうして、来年の七夕にまたふらりと遊びに行き、やっぱり知らん振りして帰つて来る。そうして、五、六年もそれを続けて、それからはじめて女に打ち明ける。毎年、僕の来る夜は、どんな夜だか知っていますか、七夕です、と笑いながら教えてやると、私も案外いい男に見えるかも知れない。

断りなく五、六年知らん振りして通い続けて、年に一度通つた日が七夕だと教えるとそれが「いい男」になると「甘つたる」く思う「私」の理解には、通常とかけ離れている部分がある。そ

いう「私」の矛盾や常識外れな部分により、彼の女性をめぐる一連の批判も怪しくなつてくるのである。このような辻褄の合わない語りは、ここにとどまらず、第三話の結末の場面においても同じである。

あの奥さんは、なにも思つてやしないのだ。謂わば、ただ唄つているのだ。夏のお洗濯は、女の仕事のうちで、一ぱん楽しいものだそうである。あの歌には、意味が無いのだ。ただ無心にお洗濯をたのしんでいるのだ。大戦争のまつさいちゅうなのに。

アメリカの女たちは、決してこんなに美しくのんきにしてはいないと思う。そもそも、ぶつぶつ不平を言ひ出していると思う。鼠を見てさう氣絶の真似をする気障な女たちだ。~~女が~~が~~、~~戦争の勝敗の鍵を握つてゐる、というのは言い過ぎであろうか。私は戦争の将来に就いて楽観している。

引用部のように、洗濯を楽しむ「奥さん」の「のんき」が「戦争の将来に就いて楽観」できる根拠になつたと「私」が結論付けたが、それは国の考へに背くことになる。戦争完遂のため、女性は聖戦を担う皇国女子、夫や子を戦場へと促す軍国の母、軍需産業の労働力を補う勤労少女としての役割を國に強く求められていて、決して「のんき」にいられる状況ではない。「女が、戦争の勝敗の鍵を握つてゐる」という戦時下のスローガンに「私」は同

調をみせつつも、その理解の内実が全く相反するものとなつた。それに加えて、「鼠を見てさえ氣絶の真似をする氣障な女たちだ」という「私」のアメリカの女性像も、現状を踏まえていない見解である。一九四二年四月アメリカの反撃が本格化して以来、山本五十六の戦死やアツツ、サイパン、テニヤン、グラムの陥落、玉碎や撤退を余儀なくされ、日本本土が空襲に曝されることになる。

緒戦の戦勝下に形成された「強国日本と弱国米英」像は現実との間に矛盾が生じ、米英の力を過小評価することへの戒めや、戦争楽観論への警戒、国民に危機感を煽る目的で、米英が悪虐非道の「鬼畜」とされ、「侮り難い敵」「強敵」へと修正が行われる。⁽¹⁴⁾「戦争の将来に就いて楽観している」という「私」の宣言は、国の警戒と戒めに対して大いに背くものとなつてゐる。

以上のように、「私は、「女の子」や、アメリカ女性像に対してもいざれも一方的に語つてゐることがわかる。そこで浮き彫りになつてくるのは、「私」の思い込みの激しさと語る内容の信憑性の低さであろう。更に、「私は女ぎらいだから」という「私」自身のことばも念頭にいれれば、「私」の女性觀がどこまで信用できるかが疑わしくなつてくるのである。ひいてはそれが基盤となって成り立つた「女が、戦争の勝敗の鍵を握つてゐる」という「私」の確信や「戦争の将来に就いて楽観」している自信も危ぶまれる羽目となる。

三、再読を促す語り

そこで、「私」の語りに不信や困惑を覚え始めた読者に、「私の語つた内容を確認させるため、或いはそれを理解させるため、作品の再読が促された。それは先行研究でたびたび問題意識として提起される三つの話の「接点」探しや、「私」の断言の根拠を探しからもわかるのである。⁽¹⁵⁾

まず、再確認されるのは、恐らく「女ぎらい」の「私」が、七夕祭りで祈願する「女の子」に持つた「厚かましい」、「ちやつかりしている」、「実利的で、ずるい」女性像である。果たして「手工の巧みならん事を祈る」ことは「私」のいうように、「自分勝手のわがまま」な願いであろうか。

日本において女性の縫製技量と織女との繋がりは、早くから浸透されて平安時代に遡ることができる。明治時代から裁縫は小学校の中等科から高等科まで必須科目として学校のカリキュラムに取り入れられ、教育の要となつてゐる。高等女学校においても、良妻賢母主義教育のために、カリキュラムに取り入れられていた。⁽¹⁶⁾女子は、国語や修身、家事、裁縫などの教科を通じて家庭を切り盛りする技術を習得し、貞淑温良、忍耐勤勉を身に付け、最終的にいい縁談を見つけて、良妻賢母となるのである。ところが、本来なら結婚するための花嫁修業としてだつたはずの裁縫教育が日中戦争の勃発により、銃後の女性の國へのご奉公のためのものとなつたわけである。

日中戦争中、人も物資も戦争に動員されるようになり、繊維製品が軍需にまわされ民需が手薄になるわけであるから、軍や政府が在庫品の利用、更生をうながすべきだと考え、衣服の更生、再利用といった実用記事を雑誌に載せるように、と婦人雑誌に国策協力を求めた。『『主婦之友』誌上には衣類の更生記事や衣服の縫い方、傷めないようにする洗濯、クリーニング、プレスなどの方法が紹介された。衣類を更生するには裁縫の知識が必須であったから、四〇年から洋裁や和裁の独習法が連載されはじめた。』と指摘されるように、婦人雑誌が、国の要請で国民服、家庭防空服、防空兜、愛国服、国策母子服、防空頭巾、モンペなどの製作を求めるようになった。⁽¹⁸⁾

そして、『『主婦之友』』の服装記事はこの頃（筆者注・一九四二年二月一日衣料の点数切符制度実施以降）から急増するが、その内容は衣服の更正法、自分で衣服を縫う方法など、いずれも女性が家庭で備蓄している衣服や生地を再利用して衣服を貽わせるための「国策」に女性を動員するためのものであつた。』と指摘されるように、女性の裁縫技量が国に動員されて、裁縫は単なる女性の、花嫁修業の「お稽古」ではなくなり、国策協力に重要な才能となつたのである。以上の資料から、女の子が七夕祭りに、「手工の巧みならん事を祈る」ことは決して「私」のいうように、「自分勝手のわがまま」な願いではなく、むしろ、銃後の女性が戦争協力において重要な役割を果たした技能だといえる。

一方、「私」につつましく「清純な祈り」だと称賛された幼女

の短冊も「戦時色に染まりに染まつた戦中の子供たちのありよう」と指摘され、危ぶまれる。確かに、一九四一年七月八日付の読売新聞にも、「短冊も『武運長久』の七夕祭」という題の記事があつて、七夕祭りに「国家隆盛、一家安泰、兵隊さんの武運長久」を一緒に祈ることを国民に呼びかける内容であった。

日中戦争中、國家統制による児童図書浄化運動が進められた。一九三八年一〇月二六日、「児童読書改善ニ関スル指示要綱」が出されて、国が、「指示要綱」を通して、児童の読物に強力な指導を加え、図書浄化による児童の思想統制が最終的に軍国少年の鍛成へとつながることを企てた。そして一九四一年四月、小学校が国民学校と改称される際に、子供を戦争遂行に積極的に協力させるために、児童も子供として扱うではなく、天皇にすべてを捧げ、将来の日本を背負う皇國臣民の一員としての自覚を持たせるべきだという考え方で、児童を少国民と改称したのである。それ以降、国民学校は「戦う少国民」の教育方針を掲げ、日中戦争が始まつた七月七日から八日にかけて、学校ぐるみで「模擬戦争」の戦争ごっこを行い、男子に鬼畜米英の藁人形を竹槍で突かせ、女子に薙刀を持たせて戦の訓練をした。学校生活はすっかり皇国民鍛成の道場になり、模擬戦争をする空間となつた。第一話の女の子の「オ星サマ」への祈願は、当時の国策教育に煽られて書かれたものでもあろう。

そこで再び考えなおすべきなのは、「昭和十二年七月七日、蘆溝橋に於いて忘るべからざる銃声一発とどろいた。私のけしから

ぬ空想も、きれいに雲散霧消してしまった」という「私」の言葉である。

「私」の言つた通りに、その「けしからぬ空想」が一九三七年の銃声一発で「きれいに雲散霧消」したならば、一九四三年の現在に「私」は多くの紙幅を費やして語る必要は全くないはずである。まして、牽牛星と織女星の一年に一度の「逢う瀬」を楽しむ夜だという七夕のもう一つの「もっと大事な意味」（第二義）を二つ三つの辞書まで引いてそれを見出せばには気が済まなくなる必要もない。そこで見えてくるのは七夕の第二義を語らずにいられない「私」の執拗さである。

前述したように、第一話で昭和十二年七月七日に銃声が一発とどろいたことで、七夕が既に「ちがつた意味を有つて来ている」こと——つまり第一義の「手工の巧みならん事を祈るお祭り」も、

第二義の〈牽牛と織女の逢う瀬の夜〉も薄らいできて、世の中は第三義の〈支那事変記念日〉で進行していることを「私」が知つていながらも、「二つ三つの辞書」も引き、敢えて執拗に第二義を語る。「私」が執拗に語る第二義の介在によつて、〈牽牛と織女の逢う瀬の夜〉に、「厚かましい」、「自分の事ばかり考えて、ちやつかりしている」、「実利的で、ずるい」といつた、「私」の七夕の短冊をめぐる女性批判が、七夕の意味の変化によつて、本来の「手工の巧みならん事を祈る」「女の子」から、そのまま「オ星サマ。日本ノ国ヲオ守リ下サイ。／大君ニ、マコトササゲテ、ツカエマス。」と祈る「幼女」へと、書かせた國や軍部により替えたものとなるのである。「私」は言葉の多義性を巧みに

操つて、それをうまくすり替えたのである。

「作家の手帖」における作品解釈の多重性は早くから注目された。柴田勝二氏はイロニーの視点から「作家の手帖」を「戦争に対する太宰のイロニーが、幾重にも仕組まれたテキストとして読み解かるべき作品だ」と述べ、そのイロニーの特徴が「〈表〉と〈裏〉の二つの相の間で反転しつづける運動性にある」と指摘した⁽²³⁾。しかしながら、「作家の手帖」は柴田氏のいつた文脈解釈の「反転しつづける運動性」にはとどまらず、ここまで検討してきたように「私」は言葉の多義性を巧みに使用して、その内実をすり替えた上で、言葉の齟齬、変質も巧みに仕組まれたのである。

四、言葉の仕掛け

作品の第一話で、「七夕」には、三つの定義が提示された。そして、「私」は「七夕」の多義性を巧みに操り、女性批判の矛先をすり替えた。作品を詳細に検証してみると、言葉の仕掛けは「七夕」だけではなく、ほかにも存在していることが分かる。例えれば、「つつましい」という言葉である。作中に「つつましい」が二回使われている。「橋を渡つて町へはいると、町は七夕、赤、黄、緑の色紙が、竹の葉蔭にそよいでいて、ああ、みんなつましく生きていると、一瞬、私も、よみがえった思いをした。」と、一九三六年に「私」が谷川温泉の街で過ごした庶民の暮らしによつて覚えた「つつまし」さが一つ目の「つつましい」である。ところが、「この祈願、かならず織女星にとどくと思つた。祈り

は、つつましいほどよい。」と、戦争を経て、七八年後、「私」の「つつまし」さに対する考え方が、幼女の祈願によつて示される〈国のために、天皇のために〉の思いに変質してしまつたのが二つ目の「つつましい」なのだが、語り手「私」は両者を同じ言葉で形容している。

一方、言葉の多義性ではなく、同じ言葉に対しても、離隔する態度を取る「私」の矛盾もある。例えば、「元気」という言葉である。「お元気ですか、と問われても、へどもどとまごつくるのである。何と答えたらいいのだろう。元気とは、どんな状態の事をさして言うのだろう。元気、あいまいな言葉だ。むずかしい質問だ。辞書をひいて見よう。元気とは、身体を支持するいきおい。精神の活動するちから。すべて物事の根本となる氣力。すこやかなること。勢いよきこと。」とあるように「私」は「元気、あいまいな言葉だ」と思い、どう答えたらいいのかわからなくて、辞書まで引いた。しかし、その直前では、「産業戦士たちは、焼酎でも何でも平気で飲むが、私は、なるべくならばビールを飲みたい。産業戦士たちは元気がよい。」と、何の躊躇いや、悩みもなく、そして、全く根拠もなく「産業戦士たちは元気がよい。」と断言した。

同じような齟齬は、煙草の火を借用することからも伺える。「私の場合、ひとよりもつと町亭に、帽子をとり、腰をかがめて、有難うございました、とお礼を申し上げる事にしている。その人の煙草の火のおかげで、私は煙草を一服吸う事が出来るのだもの、

謂わば一宿一飯の恩人と同様である。」と語っているのに、「私は人から煙草の火の借用を申し込まれる度毎に、いつもまごつく。殊にその人が帽子をとり、ていねいな口調でたのんだ時には、私の顔は赤くなる。」とも語る。煙草の火の借用をめぐって、「私も「その人」も同じく「町亭に、帽子をとり、腰をかがめて、有難うございました、とお礼を申し上げ」たのに、「一宿一飯の恩」と「煙草の火を貸す」という事くらい、世の中に易々たる事はない」というような二通りの考えがあるのである。

このように「私」が同じ行為に対して正反対の態度をとる矛盾は、果たしてただの偶然なのか。第二話の末尾に「恐縮とか痛みいるなどの言葉もまだるっこい。私には、とても堪えられない事だ。この青年の、ありがとうというお礼に対して、私はなんと挨拶したらいいのか。さまざまの挨拶の言葉が小さいセルロイドの風車のように眼にもとまらぬ速さで、くるくると頭の中で廻転した。」とあるように、「さまざまな挨拶の言葉」から懸命に選ぼうとする「私」、そして、適切な言葉がみつからないときにそれが「堪えられない」と思う「私」の、言葉選びに対する真剣さがにじみ出る。それならば、辞書を引き、言葉選びに執拗な「私」はなぜ多くの矛盾を孕む言葉を使って語つたのだろうか。この疑問を解くには、第二話の私の、産業戦士をめぐる出来事がきわめて重要となる。

第二話で、曲馬団の中をのぞいては怒鳴られて逃げるなどして楽しそうに騒ぐ街の子どもたちをうらやましく思つて、子どもの

この「私」は、彼らの真似をして、照れくさい思いで叫んで逃げた。しかし、特別な家の子どもなので、中にいれられてしまい、それが却って「わびし」くて「地獄の思い」となった。つまり、「私」にとつては、猿や馬や熊を見るよりは、街の子の一員になつて一緒に逃げたかったのである。友人は「私」のその気持ちを「民衆へのあこがれ」だと言つた。やがて、戦争の関係で、一九四〇年十一月、国民服令が公布され、戦時精神を国民に体現させるために国民全員に国民服の着用が規定された。「私は今では、完全に民衆の中の一人である。カアキ色のズボンをはいて、開襟シャツ、三鷹の町を産業戦士のむれにまじつて、少しも目立つ事もなく歩いている。」と開戦によつて、私の念願が叶い、「完全に民衆の中の一人」となつたわけである。

しかし、「けれども、やつぱり、酒の店などに一歩足を踏み込むと駄目である。産業戦士たちは、焼酎でも何でも平気で飲むが、

私は、なるべくならばビールを飲みたい」と、ビールを飲むことで、「私」は再び民衆の中から排除された。戦時下に重要な工場労働はすべて労働者に託されたので、国にとって、戦争遂行のため、産業戦士、特に軍需産業労働者の役割は重大である。国は彼等の労働意欲を促進するため、一九四三年（昭和十八）に指定された産業の工場で働く産業戦士に特別な待遇を行い、ビールの特配がその一つだった。ところが、国民服を着たにもかかわらず、「産業戦士」ではない「私」がその特配のはずの「ビール」を飲むことは良しとされなかつた。

そして、「友と思っているだけでは、足りないのかも知れない。尊敬しなければならぬのだ。厳肅に、私はそう思つた。」とある

ように、「民衆」から排除された「私」は、再び仲間に入れてもらうために、彼等をもつと尊敬しなければならないのだと想つ。ここで留意すべきなのは、同じ「民衆」と言つても、ここで「民衆」の意味は既に先ほどの「街の子ども」から産業戦士に変わり、国に役立つ人間のことを指していることである。ところで、「私」が産業戦士に、ひいては國に尊敬の意を表すために、いろいろ苦惱の末、選びに選んだ「ハバカリサマ」という言葉は、「どんな意味なのか、私にはわからない」言葉であった。それは、福田恆存氏の言つた「時流に少々あいさつ」した「お辞儀をした」言葉でもなければ、「時流に便乗して、戦争を鼓吹した」言葉でもなく、「反転しつづける運動性」のあるイロニーでもなく、それは「とんちんかん」な言葉だつたのである。

要するに産業戦士＝国に役立つ人間、ではない「私」は、「民衆の中の一人」＝国民の一人に入れてもらうために、産業戦士や国に対して厳肅に尊敬の意を表さなければならないという考えに辿りついた。言葉の意味にうるさい「私」は、さまざまの言葉が「小さいセルロイドの風車のように」「くるくると頭の中で回転」し、考へ出した最も「せいせいいし」て気持ちが良くて「からだが軽くな」れる方法は、尊敬の言葉－すなわち「時流に少々あいさつ」、「お辞儀」だと思われる言葉を並べるものであり、それが状況とのズレで意味のわからない「とんちんかん」なものとなつた

語り方である。

すると、読者に困惑をもたらした、なぜ「焼酎でも何でも平気で飲む」だけで「産業戦士たちは元気がよい。」と言い切れるのか、大戦争の真っ最中にのんきに歌を歌う奥さんが、なぜ「戦争の勝敗の鍵を握っている」のか、なぜ「戦争の将来に就いて楽観」できるのか、という「私」の言葉に孕む辻褄の合わない部分が存在する理由がわかるであろう。作家「私」は、最初から「とんちんかん」を狙つて語っていたのである。

五 おわりに

「作家の手帖」第三話で隣に住む一人の産業戦士の奥さんが、一人で井戸端で洗濯をしながら、同じ歌を何遍も繰り返して歌う。「ワタシノ母サン、ヤサシイ母サン。／ワタシノ母サン、ヤサシイ母サン。」とやたらに歌う。それを聞いた「私」は次のように思つた。「まるで、自画自讚ではないか。この奥さんには三人の子供があるのだ。その三人の子供に慕われているわが身の仕合せを思つて唄つているのか。或いはまた、この奥さんの故郷の御老母を思い出して。」と、奥さんの何の意味のない歌にも「ワタシノ母サン」に引っかかり、二通りの解釈を読み取つてしまふのである。

辞書を引き、「七夕」「元気」、しつくりこない言葉に「堪えられない」、意味のない言葉に多重の解釈を見出す（「ワタシノ母サン」）、語り手の「私」は、非常に言葉に敏感な人である。それに

とどまらず、言葉の変質（「つつましい」、「民衆」）を活用して、言葉の多義性（「七夕」）、現状とのズレ（「のんき」、米国女性への過小視）を巧みに駆使するのである。確かに「作家の手帖」では、國の望みにかなつた「オ星サマ。日本ノ國ヲオ守リ下サイ。／大君ニ、マコトササゲテ、ツカエマス。」という幼女の祈願を「清純な祈り」と評価し、のんきに歌う奥さんを以て「戦争の将来に就いて樂観している」確信をみせ、國への「尊敬の念」や、戦意鼓吹の身振りを「私」は示した。「民衆」にはぐらかされる「わびしさ」「地獄の思い」から逃れるために、「彼らの真似」をするだけではなく、産業戦士に對して、ひいては國に對しても尊敬すべきだと語つて「時局に少々あいさつ」や「お辞儀」をする。²⁴⁾

しかし、言葉に敏感な「私」は、言葉の多義性を巧みに駆使して、選びに選んで、戦争贊美の身振りを見せつとも、矛盾した辻褄の合わない「とんちんかん」な「手帖」を著した。井戸端、あるいは世の中で、一見無意味な歌詞に二通りの解釈を読み取らせるために、あたかも「無心」であるかのように「何べんも何べんも繰り返して」「自画自贊」と思われつゝも、ただ「とんちんかん」に歌い続けることで、「私」は戦時下に臨む姿勢を語つたのであつた。

注

(1) 加瀬健治「作家の手帖」『太宰治大事典』勉誠出版、二〇〇五

(2) 年一月、貢四九四—四九五。

(10) 前掲柴田勝二論、貢一六九。

(2) 権錫永「アジア太平洋戦争期における意味をめぐる闘争」

(11) 前掲古川裕佳論、貢五一。

(2) 「太宰治『禁酒の心』・『作家の手帖』」北海道大学文学研究科紀要「一〇四号、二〇〇六年六月、貢六四。

(12) 本文引用はすべて『太宰治全集6』筑摩書房、一九八九年二月に拠った。傍線と傍点は筆者自身によるもので、／は改行を意味する。

(3) 嶽大漢「太宰治『作家の手帖』論—〈自嘲〉の書—」『稿本近代文学』三二号、一〇〇六年十二月、貢三〇。

(13) 若桑みどり「日本の戦時体制と女性の役割」「戦争がつくる女性像」筑摩書房、二〇〇〇年六月、貢六七—一二八。

(4) 松本健一「増補・新版 太宰治『含羞のひと伝説』勁草書房、二〇〇九年二月、貢一四五—一四六。(原本は『太宰治とその時代—含羞のひと』第三文明社、一九八二年刊)

(14) 玉井清「写真週報」に見る英米観とその変容」「戦時日本の国民意識—国策グラフ誌『写真週報』との時代』慶應義塾大学出版、二〇〇八年一月、貢三三三—三九八。

(5) 古川裕佳「戦時下の女性像—〈女声〉の動員—」『国文学解釈と鑑賞』七二一卷一号、二〇〇七年十一月、貢四四—五一。

(15) 前掲權錫永論(貢六四—七二)、前掲嶽大漢論(貢三〇)。

(6) 柴田勝二「作家の手帖」論—イロニーの戦略—」「太宰治研究」八卷、二〇〇〇年六月、貢一六三—一七三)と前掲權錫永、

(16) 畑恵里子「落窓の君の縫製行為」『日本文学』五二一卷二月号、二〇〇三年二月、貢三。「七夕伝説が人々に愛好され、生活や文化に深く浸透していたことは、『枕草子』七段や『源氏物語』

厳大漢三氏の論のみである。

(17) 前掲權錫永論(貢六四—七二)、前掲嶽大漢論(貢三〇)。

(7) 前掲柴田勝二論、貢一六八。

(8) 前掲柴田勝二論、貢一六九。

(9) 福田恒存は、「たしかにかれは戦争中、『炉辺の幸福』、『一家団欒』を守りとおした。西鶴や、おときばなしのうちに身を守る防空壕を見いだした。そして強いられれば、時流に少々あいさつも

してみたのである。が、それほどおりいつぶんのあいさつにすぎなかつた」と指摘した(『道化の文学』『群像』一九四八年六一七月号)。

(18) 木村涼子「主婦の技能(有益の章)」「主婦」の誕生 婦人雑誌と女性たちの近代』吉川弘文館、二〇一〇年九月、貢二一九。

「全国的に統一的なカリキュラムを提示した一八八一(明治二十四)年の『小学校教則綱領』では、小学校の中等科では女子のみ「裁縫」が、高等科では女子のみ「裁縫」と「家事経済」が必須科目とされ、その後も裁縫および家事教育は女子教育の要となつていく。女子向けの中等教育機関であった高等女学校に関しても、一八九九(明治三二)年の高等女学校令が発布されるとともに、女子教育の目標は「良妻賢母」の育成にあることがさかんに強調された。

(18) 村上雍子「たかがモンペ、されどモンペ—戦時下服装の一考察」『戦争と女性雑誌』一九三一—一九四五年』ドメス出版、二〇〇七年八月、貢一三五)

- (19) ○○一年、頁二五七—二五六。
若桑みどり「総力体制化の私生活統制—婦人雑誌にみる『戦時衣服』記事の意味するもの」「戦争・暴力と女性2 軍国の女たち」吉川弘文館、二〇〇五年一月、頁二〇一。

(20) 前掲権錫水論 頁六六。

- (21) 太平洋戦争研究会編『写説 戦時下の子どもたち』ビジнес社、一〇〇六年一二月、頁五〇。

- (22) 坪内広清「軍事訓練の強化」『国民学校の子どもたち—戦時下の「神の国」教育』彩流社、二〇〇三年七月、頁六〇。

(23) 前掲柴田勝二論、頁一六六—一六七。

- (24) 戦後になつても「私」が同様のポーズをみせる。ただ「尊敬の念」を抱く対象が國／天皇からGHQに変わり、作中にGHQの鬱蹙を買ひそなな内容（アメリカの女たち）が削除され、「大君ニ」の文句が「戦争ハ、コワイデス」に、「産業戦士」が「青年工員」へと改稿された。

【付記】本稿は、日本文学協会「第三五回研究発表大会」（於奈良女子大学、二〇一五年七月五日）での発表を元として大幅に加筆・修正を加えたものである。貴重なご意見をくださった皆様に深く感謝申し上げます。なお、本稿は台湾科技部研究助成（MOST103-2410-H-155-033）による研究成果の一部である。

（りょう・しゅうけん 台湾・元智大学准教授）